

開催地名	福井県 敦賀市
開催日時	令和7年2月9日(日)10:00～11:45
開催場所	きらめきみなと館
語り部	宮本 英一(千葉県旭市)
参加者	敦賀市民130名
開催経緯	敦賀市では毎年、地域防災力向上を目的に防災に関する研修会を開催しています。 今回は、地域における防災力の向上を主眼とし、多くの方に防災について学び、関心を高めていただくきっかけの一つとして開催しました。
内容	(1)はじめに ① 自己紹介 本講演者は千葉県旭市(飯岡地区)にて、平成23年3月11日に発生した東日本大震災による津波で被災。当時、地元の区長として住民の安否確認や被災者のケアに尽力した。震災後、平成25年からは震災の経験をもとに全国各地で講演活動を行い、津波の恐ろしさや避難の重要性、命の尊さを伝える活動を続けている。 ② 千葉県旭市について 旭市は千葉県九十九里浜の最北端に位置し、漁業と農業(特に醤油産業)が盛んな地域である。平成17年には旭市、飯岡町、海上町、干潟町が合併し、現在の旭市となった。人口は約6万2千人であり、地理的には比較的なだらかな海岸線が広がっている。このため、東北地方のリアス式海岸とは異なり、過去の津波被害が比較的少なかったことから、大津波への警戒心が低かった地域でもあった。 (2) あの日のこと(地震・津波の状況) 東日本大震災は3月11日14時46分に発生し、旭市にも津波が3度襲来した。特に堤防を越えたのは2回であり、津波の規模は以下の通りであった。 ・1回目の津波:地震発生から約1時間後に到達。高さ約4.5m。 ・2回目の津波:1回目から約30分後に到達。高さ約2～3m。海の変化がほとんど見られず、住民は津波が収まったと誤認した。 ・3回目の津波:2回目から約1時間後に到達。最大7.6mの大津波となり、市街地に甚大な被害をもたらした。 この津波により14名が亡くなり、2名が行方不明となった。特に1回目の津波の後、家に戻って片付けをしていた住民が3回目の津波に巻き込まれるケースが多かった。これは、津波が1回で終わるという誤った認識や、音がしないために危険を察知しにくい津波の特性によるものであった。 ① 地震発生時の状況 地震が発生した際、講演者は海岸道路を車で走行中だった。突然の強い揺れにより車を停止し、周囲の状況を確認した。間もなく、防災無線から津波警報が発令され、近くの避難所や神社、小学校に避難する住民が続出した。 しかし、過去の経験から「九十九里浜は津波が来ても堤防を超えない」という認識が広がっており、多くの住民がすぐには避難せず、津波の危険性を軽視していた。特に1回目の津波が収まった後、多くの住民が自宅へ戻り、片付けを始めてしまった。 ② 津波襲来と避難の経緯 1回目の津波の後、防波堤に上がり海の様子を見ていた際、港の方から「大きな津波が来るぞ!」という叫び声が聞こえた。慌ててその場を離れ、自宅へ戻ると、防災無線から「大津波警報・緊急避難・団長命令」という放送が繰り返し流れていた。「団長命令」とは消防団員にも避難を命じるほどの危険な状況であることを意味していた。 その直後、突然「バリバリ」という音とともに、津波が海岸道路側の板塀を破壊しながら襲ってきた。とっさに家の脇に隠れたが、一瞬で激しい波に巻き込まれた。流されながらも、大声で励まし合いながら、何とか浮上し助かることができた。 母親の安否が不明だったが、近くの家で2階に避難している声が聞こえ、無事が確認できた。大きな余震が続く中、遠方から駆けつけた息子に避難を促され、母親と再会。母親は「人間が死ぬ時はこういうものか」と覚悟していたと語っていたことが、非常に印象的であった。

(3) その後のこと

翌日、避難先の母親の実家からトラックを借り、息子とともに自宅へ向かった。消防団によって道路は封鎖されていたが、事情を説明し、特別に通行が許可された。

自宅に入ると、家具は倒れ、窓ガラスは破壊され、壁や畳が持ち上がり、足の踏み場もないほどの惨状であった。途方に暮れる中、とにかく床下の泥をかき出すことから作業を始めた。しかし、報道では「1ヶ月以内、または1年後に同様の地震・津波が発生する可能性がある」と伝えられ、先の見えない不安に苛まれた。

区長としての責務も続いていた。津波の被害状況によって避難の有無が異なり、住民からはゴミの収集方法や、市への支援要請に関する相談が相次いだ。市の補助金や解体業者の手配など、多岐にわたる相談に対応しながら、自身の家の復旧作業にも追われた。

また、ボランティアの申請手続きは、避難者自身が行う必要があったため、手続きを簡略化し、一括対応できるように市に依頼した。避難所も3ヶ月後には32ヶ所から4ヶ所に統合され、ケガ人やペットの受け入れ、児童の安否確認など、市職員や学校教員は多くの課題を抱えていた。

(4) まとめ

① 津波は繰り返し襲ってくる

最初の津波より後の津波の方が高くなる場合がある。津波警報が解除されるまで、決して自宅には戻らないこと。

② 自分自身と家族の命を最優先する

どんな状況であっても、まずは自分と家族の安全を確保することが最も重要である。

③ 地域のためにできることを考える

日頃から地域の防災体制を確認し、いざという時にどのような行動をとるべきか考えておくことが必要である。



開催地より

東日本大震災での体験談は、テレビや新聞では伝わりきらない「災害の恐怖」を感じることができ、研修の目的である「防災意識の高揚」に大いに役立てることができたと感じています。